

人生の恩人 プラトニックラヴした永遠のカノジョ

吉田祐起 一九三二年生まれ・広島県東広島市

満七十三歳の自称万年青年がわが人生を振り返って、ゼツタイに忘れることのできない、そして、その人のことを語らずして現在の私はあり得ないほど貴重な存在であり続けてきた今は亡き村上芳野さんの御霊に感謝の心と誠を捧げながら、カノジョとの出会いの想い出ショートストーリーを記します。半世紀以上も前にタイムスリップします。

生後十カ月でポリオに罹ったボクは、原爆で倒壊した建物の下敷きになり顔面に裂傷を受けました。九死に一生を得たのです。その後間もなく、実父と死別し、長男の立場にあつたボクは、生活力を身につけることが急務と考えた義兄の意に従い、彼が経営していた市内三カ所の製材所で「帯ノコ目立師」として職人人生を歩み始めました。著名な職人さんに「弟子入り」し、器用なボクは短期間に技術を習得して独立しました。

大学進学を自ら絶ったボクでしたが、終戦直後の英語ブームもあって、英語力、とりわけ発音やイントネーションに関する限り、大学卒の人たちにはゼツタイに負けないものを把握しよう、と心に決めたものでした。

働きながら学ぶ定時制高校時代のことでした。第一回広島県高校英語弁論大会に参加しました。『How I've fought my way out』と題して、肉体的な障害を克服して生きる決意を語りました。英語では他の追従を許さないと言われていたミッション・スクール（広島女学院高校）の女学生さんを押しつけて優勝しました。発音などプレゼンテーションに自信がありました。何と言っても内容が共感を呼びました。その時のジャッジ（審査員）は広島大学教授とカナダ人女性宣教師でしたが、後者の方が頑としてボクの優勝を譲らなかった、とは後日知らされたエピソードでした。

表彰式の後、米国人宣教師のミス・アンダーソンという方がミッション・スクールの学生さんを伴ってボクの席にきました。『Congratulations! Mr. Yoshida』と優しい笑顔で握手の手を差しべながらカノジョを紹介してくださいました。その方が村上芳野さんでした。この時が芳野さんとの最初の出会いでした。第二回の英語弁論大会ではボクは「モデル・スピーカー」という形で参加しました。優勝者は他ならぬ芳野さんでした。演題は

『UNESCO as a Peace Movement』でした。

ここで奇しき縁があったのです。ボクの弟・祐司が当時広島大学附属高校生だったのですが、芳野さんの弟・處直君と同級生だったのです。面白いことが始まりました。当時英語学習に熱を上げていたボクと芳野さんでしたので、英語による文通が始まったのです。しかも、そのメッセンジャー・ボーイの役割を果たしてくれたのがボクたち二人の弟だったのです。「おい、祐司、これ處直君に渡してくれ」といった調子でした。忘れもしません、文通の内容は今から考えればとてつもない堅物でした。『What do you think about the Japanese Rearmament?』（日本の再軍備をどう思いますか?）といった具合でした。

話が前後しますが、芳野さんのご実父は当時広島大学天文学教授でした。後年女学院大学の学長もされました。その先生が芳野さんが他界して何年も経つてからのことでしたが、「吉田さん、芳野宛てのあなたの手紙がどっさりと保管されているのですが、読んでみますか?」と。勸弁してください! と顔を染めました。

ここでボクの青春時代のロマンスを語ります。初恋はプラトニックラブ・ストーリーでした。英語弁論大会参加とアンダーソン女史の紹介があつて親しく交際を始めたボクと芳野さんですが、それは純粋かつ、純真そのものでした。実名入りのストーリーが書ける所

以です。
 当時のボクは独特の技術力を求められる職人人生をまっしぐらでした。英語力を駆使してこの職業関連の書物を当時の「アメリカCIA図書館」（後のアメリカ文化センター）で物色していた向学心旺盛な青年であったのです。後年、その成果が出てくるのですが、後述します。

そんなことから、英語の文通をする傍ら、映画鑑賞のデートも何度かしました。ジョン・ウエイン主演の「リオ・グランデの砦」の想い出が鮮明です。夏のことでした。当時は映画が唯一の楽しみ時代の時代でした。満席で立ったままのボクたちでしたが、一幕の休憩に入るや、芳野さんはざっと中央に走り出て座席を確保し、手招きして誘導してくれました。足が不自由なボクを労ってくれる芳野さんの優しい人柄が今でも憶はれます。

二十歳の時でした。自宅に芳野さんを含む十数人の友人を招いて誕生会をしました。パーティーの後、芳野さん宅までの約五キロの道中をボクの自転車で送りました。後ろの荷台に乗ってもらって、でした。当時の芳野さんは女学院高校卒業後の米田大学（オハイオ州・マウントユニオン大学）留学が決定していました。忘れもしません、ボクの背後に坐っている芳野さんが言いました。「私が日本に帰ってくる頃には、私はお婆ちゃんになっ

ているでしょうよ……」と。そこで、すかさずボクは言いました。「そんな淋しいことは言わんといて！」と。それがボクにとって最大限の返事だったのです。

でも、その時に感じたボクの想いが、その後から現在に至るボクの人生に、計り知れない大きなインパクトと動機を与える結果になったのです！ ボクはその時、心の中に誓いました。「芳野さんが米田留学を終えて日本に帰ってくる時には『村上芳野女史』ってカッコいい人物になっていることだろう。ボクがいつまでも一介の職人に留まっていたら、カノジョの足元にも近づけないようになるかも知れないぞ。よっしゃー！ ボクとて、それまでにはカノジョの友人として相応しい立派な人間に成長しておかなくてはとうする！」という意地と決意だったのです。

夜道を自転車の二人乗りで芳野さんを自宅に無事届けたボクに、芳野さんのお父さんが玄関先に出てくたさって丁寧なご挨拶をいただきました。「ちよつと待っていて……」と言った奥に入った芳野さんが分厚い書籍を持って出てきました。「吉田さん、新旧約聖書です。持っていてくださいな」と。「As a token of friendship」（友情のしるしに）とカノジョの署名がありました。

間もなく芳野さんは米田に旅立ちました。追っかけの文通はないまま時が経ちました。

マウントユニオン大学在学中の苦勞の様子は風の便りでした。そうこうしているうちに、芳野さんは米国人と学生結婚し、一児(男の子)を生みました。

一方、当のボクはと言えば、芳野さんから得た刺激や動機ゆえに、自営業化した職人人生の一方で、技術革新に進進していました。前述したアメリカ文化センターで偶然に出くわした部厚い米書「Lumberman」がボクの職人人生に画期的な進歩と使命を与えました。当時の日本のこの業界で不可能とされていた技術があったのですが、英語を駆使して米国の多くの同業者や関連機械機器製造会社との文通を通じてその技術を習得したのです。関連した発明商品の販売や技術普及で全国を講演・実習行脚する青春時代になりました。

芳野さんが滞米中に縁あって、カノジョの後輩で女学院大学英文科卒の女性と結婚しました。もともと、その三十年後に離婚を余儀なくされたのですが、実はその時のお仲間さんは芳野さんのご両親である村上忠敬・さくら子ご夫妻でした。今は亡きご両者です。

一時帰国した芳野さん夫婦を広島駅に出迎えた時のエピソードがあります。旦那さんのポップさんがボクと握手しながら言ってくれました。「I know you used to be my wife's boy friend.」(私の家内のボーイフレンドだったそうですね)と。芳野さんがボクとのことを旦那さんに話してくれた！これは現在にして誇りと感じる芳野さんの誠意と友情です。

留學中の無理がたたってか、芳野さんは若くして米国で他界しました。郷里広島市の広島教会で「追悼式」がありました。「友人代表」としての追悼の辞を求められ、率直な心境を涙ながらに語りました。「ボクの人生にとって、芳野さんはかけがえない大きな存在でした。芳野さんはボクの生涯を通じてボクの心の中に生き続けてくださるでしょう……」と。

芳野さんという徳難い人物との出会いがあってこそ現在のボクであることを誇らしく思っています。多忙のために八年前に二百二十ページまで書き進みながら執筆中断している自分史「いきいき ハッラツ わが人生は三毛作」の第二章「定時制高校の想い出」【英語の弁論大会で優勝】と【英語学習が招いた良き青春時代】の節で、この辺りのことを書いています。

墓場までこの想いを持ち続けることを現在の良き家内は快く受け入れてくれています。当時読んだ英書の一節「Ty to study as if you were to live forever, and live as if you were to die tomorrow.」(永遠に生かると思っ(て)学び、明日死ぬると思っ(て)生きよ)は天国の芳野さんとボクが未だに共有する言葉です。